

審査員講評

ガラスは普遍的な素材であるが、その魅力のありようが、今までにないかたちで変容を遂げつつあるような感がある。誤解を恐れずいい放ってしまうならば、それは「感応性」の魅力、つまり身体との直接的な交感を可能にする魅力とでも言おうか。今回の応募作品の大半が、かくのごとき魅力を生み出すガラスの能力と直に切り結んでいる。「空間は理知の営みではなく、感覚の営みである」と言ったのはイタリアのモダンアートの巨匠、R・ファフロである。彼の言葉が暗示するような可能性を開示せんとする指向性が、今回の作品の多くに強く存在していると感じた。審査という、刺激的な体験を素直に喜ぶとともに、皆さんの新しい理知の構築に向けての営みを祝福したい。

今回は広範な素材の使い方を求めるテーマであったので、いろいろな材料を使い、広い視点をもった作品が寄せられた。提案部門金賞は、三つの素材を効果的かつ慎重に使っている。造形力、ロケーション設定の巧みさ、環境性、公共の場にデザインを持ち出した点や詩情性などにおいて総合力での満場一致であった。佳作にもロケーションを重視したものがあつた。また、アートの、詩的な作品もいくつか見られた。作品例部門はガラスブロックを使った作品が多かったが、金賞は均質になりがちながらスブロックによって逆に非均質性を表現し、レベルの高い操作を行った点を評価した。キッチンを扱った銅賞は日常の中に身体的な美学を取り入れた、ヨーロッパ的で詩的なエスプリにみちた作品である。

表彰式における審査委員の講評を誌面の都合上要約してご紹介します。なお、当日欠席された西沢 健氏の講評は代読されました。その原稿を要約してご紹介します。

高松 伸 (京都大学教授)



赤坂喜頭

(竹中工務店設計部設計課長)



コンペを通して、建築を一つの素材から見直し、見つめていくという作業のなかから、自分もいつも気にかけていることが表れてくる。自分もその面白さに到達しつつあるところで、皆さんの考え方、実際の建築での展開は勉強になった。また、ガラスという身近な素材が建築のみならず広い意味で環境を変え得る要素となることを示しているものに注目した。提案部門では、多様で豊かな空間が見られたものに票を入れた。金賞は雪の情景をとらえながら暖かい表現を見事に出しており、銅賞はガラスが涼しげに揺れながら保たれる情景を想像することが楽しく、何かに応用してみたいと思った。作品例部門銀賞は、ネオパリエの使い方が巧みで、空間と素材の相性がよく、特に目をひいた作品であった。

平倉直子

(平倉直子建築設計事務所代表)



全体的に見て、都市デザインに関する提案や作品、つまり、単に美しい、面白いということにとどまらない社会的課題を背景にしたものが多かったということは貴重であり、高く評価したい。一方、提案や作品が、既存の製品を効果的に使用し美しく表現したものと、新しい製品開発につながるようなアイデアが盛り込まれたもの、という大きな二つの傾向に分かれており、提案部門は特にごく身近な日常生活のなかから発想されたものが多く、かつ非常に優れていた。提案部門金賞は、ガラス材を通してほのぼのとした風景をつくりだそうとしたところに好感を持った。作品例部門の銅賞のうちの一点は、日常的な台所を扱ったところが興味深く、もう一点は今後の製品開発のあり方を示唆する好例であった。

西沢 健

(GK設計社長)



ガラスの素材特性を引き出し、潜在力を活用しているものを評価した。特に、歴史あるガラスブロックを使った作品、また、限られた枠を超えて考え出された提案に注目した。作品例部門金賞はガラスブロックの種類や特性を生かしたものを組み合わせ、光によってさまざまな表情を出していた。銀賞はネオパリエの質感を高める効果的な使い方をしていた。銅賞はガラス質のスクリーンが生み出す詩的な表情のものと、ガラスブロックの中に発光ユニットを内蔵したメディアスクリーンの二点が選ばれた。提案部門は、素材特性を生かしつつ劣化する環境を変質させるという意図が共通しており、金賞は素材特性が明確で詩情豊かな作品、銀賞は公共空間にガラス素材を用いて暖かな都市の暖炉を出現させた。

三浦紀之

(三浦紀之建築工房代表)



第五回空間デザイン・コンペティションは487点のご応募をいただき、主催者の一人として心から御礼申し上げます。対象の建材製品は四品目と多品種で、地方独特の優れた作品が多いことから、地域賞を新設しました。作品例部門では、対象建材の隠れた新しい機能を引き出すための試みが見られ、銀賞はネオパリエに吸音スリットを巧みに設けて、美しい壁面を構成していました。銅賞のガラスブロックの大型ディスプレイは、オパールンガラスの優れた発光効果を見出し、大変意義のあることと感じました。提案部門では暖かみのある金賞、すばらしい着想の銀賞をはじめ、夢のある作品を多くいただきました。これらの提案を明日に向かっての用途開発や新製品づくりに生かしていきたいと思えます。

戸谷文隆

(日本電気硝子常務取締役)

